





Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

此書はわう池庵の大人に託して。その書はわう池庵の  
おのがどい疑はしき物しと。と。う。か。し。こ。よ。り  
まじよりてし。み。ま。へ。なるが。ち。やく。一。つ。ふ。集。めて  
おのく。ま。い。り。つ。え。し。ゆ。ど。に。誰。が。老。づ。く。も  
なく。と。し。比。類。語。考。と。ぬ。ん。よ。び。あ。ら。は。り。たり  
け。る。内。の。ひ。ま。ら。け。と。の。林。大。人。幸。々。と。し。て。ま。り  
お。つ。ふ。り。浅。草。の。池。乃。不。に。う。つ。り。住。居。ひ。く。る  
ま。り。一。人。の。り。み。も。ま。り。て。ま。り。か。り。ま。り  
ま。り。ま。り。が。その。ほ。ど。道。の。論。と。詞。の。ら。ぶ。と。く

ま。り。ま。り。が。その。ほ。ど。道。の。論。と。詞。の。ら。ぶ。と。く





けいでふ引て解しきるるるやなれどそれ  
 かし先きつ大人らちかきなる顔ふい  
 異なるすすれうほびいふわさういしく物  
 事いれ人のえ人のたうてふながく漏さげ者  
 うびかしらに○をたして昔く筆うそん人  
 うらつ事においひうごふ事なられ

天保二年五月廿一日  
 室の中よりふひうら  
 しく

雑考初編目録

アワヲ 三ノ十一丁

あらうの 三ノ四十三丁  
 あらねふ下

あらう海 三ノ五十一丁

あけまぶ 三ノ四十四丁

あそく 三ノ四十四丁

あやう 三ノ四十三丁  
 あそくふ下

阿波岐原 三ノ一丁

8 あらう川 三ノ四十二丁

○あさり 三ノ十一丁  
 いもをうし下

青嶋 三ノ五十一丁  
 三ノ馬ノ下

ああまぶ 三ノ四十四丁

あいつき 三ノ五十一丁

○あつやく 三ノ四十三丁  
 あそくふ下

あそくふ 三ノ四十三丁

新さねバ 三ノ四十一丁

天乃血症 三ノ四十一丁  
 聖徳天皇之新集下  
 前書七



あとうがら 一ノ十五丁  
あつちのふと下

○あつちのふと 一ノ三十丁

あねあねや 一ノ五丁

あまのやまうげ 一ノ二十九丁

あつちのふと 一ノ四十二丁  
あつちのふと

○あつちのふと 一ノ四十九丁  
あつちのふと

あつちのふと 一ノ三十三丁

あつちのふと 一ノ四十四丁  
あつちのふと

ありあけ 一ノ四十九丁

天津菅曾才 一ノ八針取野成 一ノ二丁  
菅曾下

伊呂 一ノ十二丁

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

出立 一ノ三十五丁

伊豆手船 一ノ十三丁

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

イサナトリシ 一ノ十一丁  
鯨魚取海

いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

盤之媛命 一ノ六十二丁

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

うはちやう 一ノ三十二丁

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

うらばやき 一ノ六丁  
うらばや下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

馬之八匹 一ノ八丁  
子之木下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

うらばやき 一ノ六丁  
うらばや下

内兵 一ノ五十一丁  
内阿勇下

○いんせ 一ノ十一丁  
伊呂下

○うつちをり新しき ニノ四十二丁

○雪上之新しき 一ノ三十三丁

右近のうちばのひとりの日 三ノ五十二丁

○えんご ニノ五十五丁

ちみし ニノ五十五丁

○弟田賣 ニノ八丁

○弟ひらり ニノ八丁

弟棚機 ニノ八丁

大久米主 ニノ四十七丁

西高夫駄 三ノ五丁

思熊王 一ノ四十七丁

○大伴御津 ニノ四十七丁

おろし ニノ四十三丁

大久米命 ニノ四十七丁

大伴高師 ニノ四十七丁

大伴熊敏 ニノ四十七丁

口大之尾翼鱸 一ノ三十八丁

大口乃真神原 一ノ三十八丁

かつと木 ニノ三十三丁

○法葉 一ノ二十五丁

○かほり ニノ五十七丁

○かき 一ノ十一丁

かき ニノ十丁

○風 一ノ三十八丁

かり ニノ四十五丁

あし ニノ二十八丁

え末部 ニノ四十七丁

え末子等 ニノ四十七丁

○熊菓 ニノ四十七丁

え末若子 ニノ四十七丁

○熊野船 一ノ十三丁

くわいせいの 二ノ二十五丁

こわいせいの 三ノ三十二丁

くわいせいの 三ノ四十二丁

くわいせいの 三ノ四十二丁

サキクサ 三ノ二十丁

さくさくづま 二ノ十丁

3 さくさくづまのやどり 二ノ十五丁

齋明紀産録 二ノ五十九丁

○下都 二ノ四丁 美奈岡下

タマノコレモ 二ノ四十七丁

くわいせいの 三ノ三十七丁

くわいせいの 三ノ四十二丁

子々一本 二ノ八丁

○さくさく 二ノ十五丁

賢木葉の香 二ノ五十七丁

三種の香 二ノ二十丁

○さくさく 三ノ三十二丁

そのさくさく 二ノ五十一丁

菅曾 三ノ一丁

○下都 二ノ四丁

○下都 二ノ四丁

すくさく 二ノ四丁

すくさく 二ノ四丁

○須磨浦まきのくわいせいの 二ノ四丁

○さくさく 二ノ五十五丁

玉串 二ノ二十五丁

タマノコレモ 二ノ四十七丁

くわいせいの 三ノ三十七丁

くわいせいの 三ノ四十二丁

子々一本 二ノ八丁

○さくさく 二ノ十五丁

賢木葉の香 二ノ五十七丁

三種の香 二ノ二十丁

○さくさく 三ノ三十二丁

そのさくさく 二ノ五十八丁

菅曾 三ノ一丁

○下都 二ノ四丁

○さくさく 二ノ五十六丁

すくさく 二ノ五十六丁

隅田河のさくさく 二ノ四十六丁

○さくさく 二ノ五十六丁

タカガ 二ノ二十五丁

竹玉 二ノ二十五丁

前書十

○玉の結 三ノ十一丁 注緒下

鎮魂 三ノ十一丁 注緒下

8 桶、小門 一ノ一丁

こくろ 一ノ三十七丁

こはやが 三ノキ丁

フぼ 三ノ四十七丁

つらぐも 三ノ五十五丁

つやく 三ノ四十五丁

乾岡の柳原 一ノ六十丁

○魂 三ノ十一丁 注緒下

○魂 三ノ十一丁 注緒下

たまご 三ノ九丁

こくろ 一ノ三十七丁

あや 三ノ四十三丁

フぼ 三ノ四十七丁

フー 三ノ四十五丁

つらぐも 三ノ五十五丁

たまご 三ノ四十五丁

○さき 三ノ五十五丁

土佐日記正月十日の文 三ノ十八丁

なう 三ノ四十五丁

○あ 三ノ五十五丁

子日 三ノ三十五丁

○ 三ノ三十五丁

さ 三ノ三十五丁

○速吸名門 一ノ二丁 橋、小門下

さ 三ノ四十五丁

登陀流天々新集 三ノ二十六丁

土佐日記正月十三日の詞 三ノ十九丁

あ 三ノ十九丁

○ 三ノ五十五丁

根之堅洲國 一ノ四丁 黄泉国下

は 三ノ三十三丁

○馳水 一ノ二丁 橋、小門下

○皮薄久米 三ノ四十七丁

日之宮 ヒノミヤ 一ノ三十三丁

日之御門 ヒノミカド 二ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ四十八丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

日影 ヒカゲ 三ノ三十三丁

槍之宮 ヒノミヤ 一ノ三十三丁

槍之御門 ヒノミカド 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

日之宮人 ヒノミヤヒト 一ノ三十三丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

8 麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

麻薩義守波理 マサタケノハリ 三ノ一丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

真折鬘 マキノスツラ 三ノ三十三丁

やうくわんが 一ノ三十七丁

○まろほ 三ノ十八丁  
すくろれ巻下

○もろろつ 一ノ三十四丁  
あつれえろ下

モ、ハリツガ  
百張獲我 三ノ一  
菅首下

ものあつ貝 三ノ二十三丁

○やうこ 三ノ三十三丁

ちろり 一ノ四十四丁  
くろも下

八田皇女命 三ノ六十三丁

ヤサカニノイホツミスルノミ  
八坂壇之五百箇御統玉 三ノ四丁

かろろり 三ノ六十四丁

○めろまろ 一ノ三十四丁

りろろろ 三ノ六十四丁  
りろろ下

○めろろろ 三ノ二十六丁  
登院巻下

やうこ 三ノ三十三丁

やろれろ 三ノ十七丁

八重立神祇 三ノ一丁

ゆろり 三ノ四十二丁

らろろ 二ノ十四丁

ヨリヤ 三ノ五十二丁  
日ごりの下

黄泉國 一ノ四丁

夜中のろり 一ノ四十二丁

わくけ 三ノ四十五丁

○わろろ 三ノ四十五丁  
わけ下

走出 三ノ三十五丁

わろろ 三ノ四十三丁  
ろろ下

三ノ六十四丁

一ノ三十四丁

三ノ六十四丁

三ノ二十六丁

三ノ三十三丁

三ノ十七丁

三ノ一丁

ニタムケカ 三ノ四十四丁  
往左来左 あろろ下

○ろろ 三ノ十四丁

ろろろ 三ノ五十七丁

○ろろろ 三ノ十四丁  
ろろ下

よろのろろ 一ノ五十三丁

○わろく 三ノ四十五丁  
わけ下

わろろ 三ノ四十五丁

ろろろのろろ 三ノ十四丁

○ 志みまうり ミノ四十五丁  
わけ下

○ 招餅 一ノ二十五丁  
まうりまの木下

○ まうり ミノ三十五丁  
まうりまの木下

○ 招禱鏡 一ノ二十五丁  
まうりまの木下

まうり ミノ四十五丁

○ まうり ミノ三十五丁  
まうりまの木下

○ まうり 一ノ二十五丁  
まうりまの木下

わがし... の中...  
まの... の...  
換名...  
し...  
し...

山響冊子卷一

橘守部草

は...  
は...

○ 橘小門 アハキバラ  
阿波岐原

○ 速吸名門 ハヤスヒナド

○ 馳水 ハシリミツ

古事記上巻... 到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原

而襖被也... 傳註曰橘小門阿波岐原ハ松原桂原柳

原栢原... 只此樹... 多く生てある地を

之也... 此況... 垂仁紀... 九十九年

秋七月天皇崩云云 明年春三月田道間守至自常世

國則賣物也 非時香葉八竿八縵馬...  
モチニ年コヒノハ トキシクノカシノコヒ ヤホコ ヤカガナリ

世に引りし橋をうらふ神に  
みまをうらふるにあらはれ  
しと語り傳へしは  
これ彼橋をうらふ神に  
うらふるの事あるを  
傳へしやあらはれし  
ゆらば神に  
まのこゝろ減あひまの  
世に引りし橋をうらふ神に  
みまをうらふるにあらはれ  
しと語り傳へしは  
これ彼橋をうらふ神に  
うらふるの事あるを  
傳へしやあらはれし  
ゆらば神に  
まのこゝろ減あひまの

考ふに  
言珠約り  
瀬弱而初於中瀬  
門とすゆ又神代紀一書御楔條  
と早走と音と意を通り  
と志初と同韻なり  
門ともいふ  
同書下卷  
一丁  
二  
火折尊  
海神所乘駿馬者八尋



鰐也。是豎其鱗背而在橋之小戸コノドより名を。又神武紀  
小天皇親帥諸皇子舟師東征。至速吸之門トクヒノカドより。共  
一水門ミヅカドの名とせられたり。其の速吸名門と  
豊後トヨノヘの國と云ふは。神名帳に。豊後國海部  
郡早吸ハヤヒノヒ日女神社とありて。や後列其處の地名  
やあり。其地水門ミヅカドあり。其の地水門の  
御禊の條に。包らるるも。飛鳥紀に。みとあるは。皆日  
向らる。此は。元より中津の地と云ふ。あり  
なり。事。景行紀に。亦進相模イノチカモ云々。可立コタテ跳

渡故時人号其海曰馳水チミヅとあり。此詞の次其地名  
皆風土記狀の旧辭にて。取らる。此處も水に通  
ずの多うれ。非也。此處も水に通  
所あり。馳水チミヅと云ふ。其名義も。立走波タチハと云  
ふ。全ら同意とす。おとす。立走波タチハと云ふ。此  
多知波那タチハナともて。省約する。此は。多知波那  
と云ふ。語。物れ名とす。此は。多知波那  
と云ふ。異。如く。多知波那。例多。多知波那  
と云ふ。此は。宇治拾遺物語に。藏人得業惠印と云。僧  
鼻大と云ふ。多知波那。大鼻。此は。藏人得業と云ふ。

チミヅ

と、はくは鼻藏人とつん。ちのりきよは鼻藏と云  
けいふくつゝ新ひ。今もつうきもおひつゝふひら  
ふ。又上件の阿波岐原と書紀に、檍原と書くは  
借字より水の淡き原と云ふなり。海と河とれ落合る門ハ、水より淡くなり。御身と滌  
ぎ賜ひひも。さすうづみ潮水と云ふ。堪ふと云ふ  
これバ、水は玄走りく。淡き処に、水は  
信くものうごり。其一書ハ、阿波岐原と粟門と云  
ふ。檍字ハ借字なり。つゝ明くは、

走波之小門之淡原在中瀬立而滌し意ハ  
走波之小門之淡原在中瀬立而滌し意ハ

○黄泉國

○根之堅洲國 ○下部

同書ハ、黄泉國根之堅洲國祝詞ハ、根國底之國あり  
つん傳へし、ふ就く、彼傳註し、地下、下、底の方、在て  
死し人往く居國也と云ふ。又天國、黄泉と上中下に分  
りし、論で、其説の、其の、  
道の、  
半

御魂の天に昇りて

人し。賤人も善人も悪人も。成く黄泉國へおろされば  
うねりもあられ振らるなり  
去年上木セー本ハ少し  
言と省してはるし王  
ちりくはてはるし本花うらみあふ。ちりくとまば  
天照大御神。吾御愛と所念者御孫命の八十續をり  
天上に坐ハさる愁ひもアチカレコ  
ちりて御座ちしものと痛畏永世まじく皆根國へ沈  
りく。苦惱奉らひりて天降しはるしりてせむしう。  
天神の命とて。うさささ御思量の掛きりあ  
るなり。遠き御世より皇孫命に岩御と外トを申  
傳へりも。御魂の天に昇りて。の古言よきまば  
ちりけれ。

其とろる浦ふ黄泉國に墮陀坐ひりて忌く申は  
ちりねぞいけり。ちり痛くやうまてあふる本  
記もみく。ちりくそま。神の道をおくつわと  
ちりる人れ。ちりみちちりちりちりちりちりちりちり  
ちり。の辨へり。萬葉卷ニ。天智天皇崩時皇后御作  
歌。青旗乃木旗能上乎賀欲布跡羽目爾者雖視直  
不相香裳。まじく高市皇子尊。殞宮之時。柿本朝臣人  
麻呂作歌。久堅之天所知。君故尔日月不知。意渡鴨  
ちり。有鳥皇子れ結賜へ。磐白松をりく。ちりる歌の  
五

追和ふ山上憶良鳥翅成有我欲叱管見良目狩母人  
社不知松者知良武此等歌なれば禁示忌てのいふや  
うのむとありけりて天翔とも天所知とありけり又  
古事記に倭建命崩坐したる條に自其地更翔天以飛行  
とありけり其御免現し白智鳥と顯し坐し伊勢國能  
煩野より河内和泉幾許の國ごとく翔りけりて終  
て天より与り給ひし事底之國尔沈みけりて灼き  
證ありけり  
續後紀卷九承和七年五月辛巳後  
太上天皇願命皇太子曰まま予聞人没精魂皈天而

ちうくちうくちうくちうく  
わいんわいんわいんわいん

存冢墓鬼物憑焉とありて人死て黄泉國へ  
往ふゆ舊辭ハヤシカレ歌ニ周法より言ひけりて  
まのいふと云ふ明きる居間とて闇き處へあつても  
眼と袖とぬぬとありて即豫美ハ夜見の義とて闇とて  
音通てり黄泉とかくと骸と地下に埋む故そと國  
知るものりけるを旧辭の常より國地と指く人れ如  
くオモコツ面四シラヒツテありて白日別此類の古言と  
毒き一の考もありて萬葉卷三小左理願が死けるすれ大





吾友小佐野豊下野問古雄畧紀歌小上畧宇麼能耶

都擬播鳴思誓矩謀那斯此耶都擬と難波阿國梨説

子蕪方ハ八毛言ハ八匹也と註一ハ毛ハ八毛也ハ耶

都礙ともふし若礙と擬ふ誤りともはれともはれ

何其の本も擬とあれハ誤ともはれハ匹とハ毛ともはれ

つづらうとせしめ又我抄ハ八次第とありともはれ負数の

次第と継ともはれ物ともはれ獸ともはれ表と次第

ちとせしめしむるも此を辨外に其由はれ

答云ふん承つて記註ともはれ善ハ馬之八足者子

てもあるうハ匹と耶都擬ハ注音の字あれとも

ホ書了処多うれハ此ハ雲立とハ裳刺

ハ清てりひべきまりハ世とハ世萬葉十八卷又二十卷

倭建命御歌り有ハ世とハ世夜都代と書り

ハ峯とハ峯と云類おのれ状ありと擬と云て

匹字の音もあはれ本より此問の言あり古事記

上巻ハ故爾伊邪那岐命詔之愛我那邇妹命乎謂易

子之一木字乃匍匐御枕方匍匐御足方而哭時とあり

了此一木と同じ故按ハ此言を右の雄畧紀の初れ

いゝ木獸と一匹二匹と數つと詞たりと伊邪

ナキ、  
 那岐命の如しと詠ひし事。彼、  
 可アタラシ惜ホシ所オモホシ會ホシ者ホシ起ホシちホシるホシ級ホシ。迦カ具ツチ土ツチ神ツチと惡ツチ  
 とく。御ミ子コ之ノ一ヒト匹ツキとをオトシ賤シりシ。詠イへシ御ミ詞コトをイへシ。  
 今世の傳ツ言クあハもハ子コとモ一ヒト匹ツキぐラるル。  
 1. 換カらレれンやチどキ。幸マこトをイへシ。其ソノ御ミ子コとモ阿ア多タ  
 古コとモ申マすモ。仇アツ子コのミをイへシ。おハりハ合アはレてハ。古コ事コト記キ  
 之ノ一ヒト木キとモ古コ能ノ比ヒ登ト都ツ氣ケとモうレれトもハ。木キとモ氣ケとモ  
 よハむハ。御ミ杖ツのミ如ニくハ。木キのミうレへト活イ用ヨしテ。時トキの  
 非ヒ常ト又マ其ソノ説セどモりハ。痛イくハ連ツるル。大オホ江エ邊ヘ房フ御ミのミ移ユふ。  
 中ナカやモをイへシ。花ハナとモうレれハ比ヒ登ト伎キ布フ多タ伎キのミ駒コとモうレせ  
 一ヒト匹ツキとモ當アらハるル。終ハるル字ジ音オン一ヒト牽ヒキとモうレ。一ヒト匹ツキ二ニ匹ツキ  
 とモうレるル。子コとモ一ヒト匹ツキとモうレるル。匹ツキとモ漢カン籍セキ風フウ俗ソク通トウ。馬ウマ稱ショウ  
 疋ヒト者シヤ。俗ソク説セツ。女メ相サウ馬マ及キ。君キミ子シ與ヨ久ク相サウ疋ヒト。故コト去キ疋ヒトとモうレ。絹クワン  
 布フ一ヒト疋ヒト二ニ疋ヒトとモうレ。此コト謂イハれル。玉タマ膝ヒザ間マ。絹クワン布フとモうレ。匹ツキとモうレるル。馬ウマとモ牽ヒキとモうレるル。一ヒト葉エフ二ニ葉フタのミ也ナリ  
 とモうレるル。上ウヘ件ケンのミとモうレるル。心ココロけレれル。とモうレるル。とモうレるル。  
 是コトをイへシ。彼カノ雄ヲ畧リヤク紀キのミ終ハるル。字ジ麼マ能ノとモうレるル。能ノ  
 のミとモうレるル。馬ウマ乃ハ八ヤツ疋ヒトけレるル。何ナニのミ惜オシきムとモうレるル。  
 一ヒト匹ツキとモうレるル。

匹ツキ字ジとモ當アらハるル。終ハるル字ジ音オン一ヒト牽ヒキとモうレ。一ヒト匹ツキ二ニ匹ツキ  
 とモうレるル。子コとモ一ヒト匹ツキとモうレるル。匹ツキとモ漢カン籍セキ風フウ俗ソク通トウ。馬ウマ稱ショウ  
 疋ヒト者シヤ。俗ソク説セツ。女メ相サウ馬マ及キ。君キミ子シ與ヨ久ク相サウ疋ヒト。故コト去キ疋ヒトとモうレ。絹クワン  
 布フ一ヒト疋ヒト二ニ疋ヒトとモうレ。此コト謂イハれル。玉タマ膝ヒザ間マ。絹クワン布フとモうレ。匹ツキとモうレるル。馬ウマとモ牽ヒキとモうレるル。一ヒト葉エフ二ニ葉フタのミ也ナリ  
 とモうレるル。上ウヘ件ケンのミとモうレるル。心ココロけレれル。とモうレるル。とモうレるル。  
 是コトをイへシ。彼カノ雄ヲ畧リヤク紀キのミ終ハるル。字ジ麼マ能ノとモうレるル。能ノ  
 のミとモうレるル。馬ウマ乃ハ八ヤツ疋ヒトけレるル。何ナニのミ惜オシきムとモうレるル。  
 一ヒト匹ツキとモうレるル。



○くさぐさ〜

鯨魚取海

○それ〜 ○それ〜 ○それ〜

○それ〜 ○それ〜 ○それ〜

古事記神武段、大御歌。伊須之波斯之治良位夜流、多云。厚教秘之。殊と佐と音通。伊須細也。鯨と勇

魚〜云。勇魚と書り〜。好考也。此は〜。

鯨と伊須〜。勇魚〜。本の〜。了言。伊須〜。

其〜。古事記傳。〜。伊須〜。

又果仁歌解。〜。稜威細也。都〜。伊須〜。

わ〜。元恭紀。衣通。郎姫の御歌。異舎離等。伊須〜。

波摩毛能、多〜。異舎離の舎離の約り。舎〜。

と、伊須〜。伊須〜。伊須〜。異舎離と

と、伊ハ昔伝〜。潜魚〜。其故ハ雄畧段大

御歌。美那曾々久。美能袁登賣と〜。久の韵松

宇〜。呼連行〜。約〜。水潜魚〜。水

〜。又武烈紀。弥能曾。矩思宿。和俱吾鸣

と〜。水潜箱〜。伊須〜。伊須〜。伊須〜。伊須〜。

よ〜。水〜。と経通。伊須〜。伊須〜。伊須〜。伊須〜。

又仁徳紀。弥能曾。虚赴。於弥能。鳥苔。伊須〜。水底。伊須〜。

あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

北ハ久ク釣ノ字ヨリ呼連リテ

継體紀<sup>ニ</sup>美<sup>ミ</sup>雄<sup>ナ</sup>矢<sup>シ</sup>駄<sup>ダ</sup>府<sup>フ</sup>紆<sup>ウ</sup>鳴<sup>ナ</sup>謨<sup>モ</sup>紆<sup>ウ</sup>倍<sup>ヘ</sup>你<sup>ニ</sup>提<sup>テ</sup>々<sup>々</sup>那<sup>ナ</sup>體<sup>ゲ</sup>矩<sup>ク</sup>と

あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。これより準<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

雄<sup>ナ</sup>等<sup>ト</sup>利<sup>リ</sup>と。伊<sup>イ</sup>ハ哉<sup>カ</sup>潜<sup>カケ</sup>魚<sup>イサ</sup>取<sup>トリ</sup>。須<sup>ス</sup>奈<sup>ナ</sup>利<sup>リ</sup>と云も、異<sup>イ</sup>舎<sup>サ</sup>雄<sup>ナ</sup>等<sup>ト</sup>利<sup>リ</sup>

も。奥<sup>ウ</sup>渾<sup>ホ</sup>の物<sup>モノ</sup>れり。又<sup>マ</sup>此<sup>コ</sup>レ<sup>レ</sup>准<sup>ス</sup>へて按<sup>オ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

て出<sup>デ</sup>る言<sup>コト</sup>とす。鳥<sup>トリ</sup>ハ浅<sup>アサ</sup>き处<sup>トコロ</sup>のナリ。鳥<sup>トリ</sup>ハ食<sup>ク</sup>む。これよ

ど。いさりと云<sup>イ</sup>言<sup>ハ</sup>し。叶<sup>エ</sup>ひ。小<sup>コ</sup>きのみならん。さうし

て。其<sup>コノ</sup>細<sup>コト</sup>。語<sup>コト</sup>例<sup>レ</sup>と考<sup>カ</sup>ふる。香<sup>カ</sup>細<sup>コト</sup>。花<sup>ハ</sup>細<sup>コト</sup>。名<sup>ナ</sup>細<sup>コト</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

如<sup>カ</sup>く。皆<sup>カ</sup>體<sup>カ</sup>言<sup>ハ</sup>し。連<sup>レ</sup>け。此<sup>コノ</sup>勇<sup>ユウ</sup>細<sup>コト</sup>。稜<sup>レ</sup>威<sup>カ</sup>細<sup>コト</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

又<sup>マ</sup>鯨<sup>クジラ</sup>を大<sup>オ</sup>奥<sup>ウ</sup>ふ。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。鱈<sup>ダ</sup>と云。小<sup>コ</sup>奥<sup>ウ</sup>。食<sup>ク</sup>む。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

物<sup>モノ</sup>として。鰐<sup>カサネ</sup>も。鮫<sup>サマ</sup>も。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。猛<sup>マウ</sup>き魚<sup>イサ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

稜<sup>レ</sup>威<sup>カ</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>集<sup>シツ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

伊<sup>イ</sup>佐<sup>サ</sup>奈<sup>ナ</sup>等<sup>ト</sup>利<sup>リ</sup>と。勇<sup>ユウ</sup>奥<sup>ウ</sup>と書<sup>キ</sup>す。義<sup>ギ</sup>訓<sup>ニ</sup>。鯨<sup>クジラ</sup>魚<sup>イサ</sup>取<sup>トリ</sup>と書<sup>キ</sup>す。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。誰<sup>ナニ</sup>も鯨<sup>クジラ</sup>の名<sup>ナ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

鯨<sup>クジラ</sup>の。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。鯨<sup>クジラ</sup>魚<sup>イサ</sup>も。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

鯨<sup>クジラ</sup>取<sup>トリ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。乃<sup>ナラバ</sup>海<sup>ウミ</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

清<sup>キヨ</sup>三<sup>サン</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。濱<sup>ハマ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

清<sup>キヨ</sup>三<sup>サン</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。濱<sup>ハマ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

清<sup>キヨ</sup>三<sup>サン</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。濱<sup>ハマ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

清<sup>キヨ</sup>三<sup>サン</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。濱<sup>ハマ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

清<sup>キヨ</sup>三<sup>サン</sup>と云。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり。濱<sup>ハマ</sup>。あつた 水<sup>ミナ</sup>下<sup>タ</sup>経<sup>ナ</sup>魚<sup>イサ</sup>あり

浦回ちかきも。多くきつり。昔と以ても。異会雖も  
初ハ。鯨魚取と云。た。須奈利利す。法と。濱と。離るも。  
又。近江の湖。そも。あ。く。き。詞。た。き。し。か。ら。ば  
其。潛魚取と。鯨魚取と。書所由ハ。つ。み。の。ゆ。こ。此々  
鯨魚一ツ捕ハ。そ。く。げ。け。利。潤。と。得。て。法。正。の。里。と。販  
り。つ。り。物。を。れ。は。つ。り。の。漁。業。の。中。し。る。さ。し  
海。く。お。欲。す。も。の。を。鯨。鯢。と。呼。ぶ。鯨。魚。と。は。魚。櫛。の。中  
の。東。上。れ。物。と。り。て。書。け。ら。る。る。た。ま。く。一。つ。は。例。と。成  
る。も。り。り。い。れ。ハ。伊。須。久。比。斯。と。も。也。伊。須。久。比。斯。と。も。也。伊。須。久。比。斯。と。も。也。  
伊。須。久。比。斯。と。も。也。伊。須。久。比。斯。と。も。也。伊。須。久。比。斯。と。も。也。

魚。中。一。鯨。と。賞。て。さ。し。る。枕。河。と。き。と。り。ん。定。  
ひ。あ。り。

○伊豆手船

○熊野船

伊豆手船と云。その説區々。つ。て。つ。ま。あ。ら。う。り。れ。  
代。匠。記。一。五。手。あ。り。十。人。と。て。榜。船。也。と。り。る。中。し。る。さ。し。  
は。つ。り。り。り。畧。解。と。み。り。つ。れ。と。き。と。万。葉。集。甲。一。一。伊。  
豆。と。の。と。書。し。れ。ハ。都。の。ま。た。清。濁。甚。な。り。と。り。又。近。來。或。人。  
伊豆出船と云。伊豆國より漕出せり。と云。の。ゆ。こ。り。大。方。  
の人。志。の。と。つ。り。き。と。出。の。と。あ。ら。う。り。手。と。は。書。す。と。



船フネ尔乘ノリ而テ奥部オキベ榜所ヨグニ見ユ。此コノ船フネ志摩シマの海人ウミナの造ツクりたる也。

其コノ船フネ之ノ造ツクり。難野ナニノ船フネと云イハふ。其コノ製ツクり。越コト後ノチ也。

伊豆イヅ國ノ船フネ。伊豆イヅ國ハ船フネ多クし。其コノ製ツクり。其コノ國ノ造ツクり。

他國タノクニ之ノ製ツクり。其コノ製ツクり。其コノ國ノ造ツクり。

猶ナホ伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

字ジと附ツケく。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

佐吉サキモ母モ利リ能ノ保ホ里リ江エ己コ藝キ豆ヅル流ル伊豆イヅ手テ夫バ祿ネ可カ治チ等ト流ル

間マ奈ナ久ク息コヒ彼バ思シ氣ゲ家ケ年ナム。此コノ防ボウ人ニン等ト。難野ナニノ船フネ。

公キミの船フネ。乘ノリせり。筑紫ツクシへや。其コノ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネと

又同卷。天平勝寶八年。聖武天皇。難波宮ニ行幸

の時。家持卿の歌。○保利江ホリエ己コ具グ伊豆手イヅテ乃ノ船フネ乃ノ可カ

治都チツ夫フ米メ粒リ等ト之ノ婆ハ多タ知チ奴ヌ美ミ乎ヲ波ハ也ヤ。美ミ加カ母モ。此コノ等ト。伊

豆マメ國クニより出デ。其コノ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

又卷十二。○和浦船ワノウラフネ。其コノ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

難波ナニノ堀ホリ江エ船フネ。其コノ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

○伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。伊豆イヅ手テ船フネ。

まづそんハ何ガゴロウニルルハナレド、  
ナドモハコトナクハ、  
カレトモ、  
まづのいきりおのりゆき、  
頭捕頭も申され、  
又後きよし、  
終つて、  
あらば、  
おれ、  
此、

其もれど、  
とて、  
いふも、  
あつ、  
其、  
早草、  
いふ、  
いふ、  
いふ、  
考人、



あつちういり

かく、今ゆるまりしとふりて、さうりけり向ふ。その女れ許へ  
 外フミカヨ上書通し人ありと。年の方よりかくつて、久しくゆ  
 かりまじうなれば、母れ詞も、今もむきもほくも、かく申し  
 せりとく、こころと。其むきも代りてつて、さうりけり。し  
 ありやういり、後アガ憂談の義も、後悔も、さうりけり  
 ぬきや、かみむくが、さうりて、さうりけり。さうりけり、さうりけり  
 ぬきのさうり。わや、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 ぬり、ぬりぬり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 した、さうりけり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり

あつちういり

さうりぬり、ぬりぬり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり  
 さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり、さうりさうり







信<sup>ト</sup>了<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>。此<sup>ハ</sup>佐<sup>サ</sup>草<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>三<sup>サ</sup>枝<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>。一<sup>ツ</sup>物<sup>ヲ</sup>を<sup>ク</sup>。形<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>。  
以<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。凡<sup>ソ</sup>て<sup>ハ</sup>昔<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。如<sup>シ</sup>中<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。他<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。姑<sup>ク</sup>  
彼<sup>ノ</sup>説<sup>ハ</sup>より<sup>テ</sup>後<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。如<sup>シ</sup>中<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。他<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。凡<sup>ソ</sup>て<sup>ハ</sup>昔<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。  
凡<sup>ソ</sup>て<sup>ハ</sup>百合<sup>ノ</sup>の<sup>種</sup>類<sup>ハ</sup>。五<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。六<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。入<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>。四<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>あり<sup>ニ</sup>。  
お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。  
め<sup>レ</sup>て<sup>ハ</sup>。生<sup>ル</sup>。葉<sup>々</sup>相<sup>當</sup>也<sup>ナリ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。  
そ<sup>の</sup>お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>。  
ふ<sup>ハ</sup>孟<sup>夏</sup>三<sup>枝</sup>祭<sup>義</sup>解<sup>云</sup>。謂<sup>率</sup>川<sup>社</sup>祭<sup>也</sup>。以<sup>三</sup>枝<sup>華</sup>飾<sup>酒</sup>樽<sup>。</sup>  
祭<sup>故</sup>曰<sup>三</sup>枝<sup>也</sup>。と<sup>あり</sup>。因<sup>テ</sup>。守<sup>部</sup>。採<sup>ル</sup>。此<sup>ノ</sup>。必<sup>ズ</sup>。一<sup>ツ</sup>。也<sup>ナリ</sup>。

其<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>の<sup>枝</sup>は<sup>三</sup>枝<sup>づ</sup>。ふ<sup>も</sup>て<sup>生</sup>ぬ<sup>る</sup>。花<sup>三</sup>枝<sup>と</sup>折<sup>て</sup>。  
酒<sup>樽</sup>と<sup>飾</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。  
身<sup>ノ</sup>。姓<sup>氏</sup>録<sup>一</sup>。顯<sup>宗</sup>天<sup>皇</sup>御<sup>世</sup>。三<sup>莖</sup>之<sup>草</sup>生<sup>於</sup>宮<sup>庭</sup>。  
採<sup>以</sup>奉<sup>獻</sup>。仍<sup>負</sup>姓<sup>三</sup>枝<sup>部</sup>造<sup>と</sup>あり<sup>。</sup>三<sup>莖</sup>字<sup>ハ</sup>ハ<sup>た</sup>。三<sup>本</sup>の<sup>草</sup>。  
と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。  
出<sup>て</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。  
と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。  
と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。  
採<sup>て</sup>奉<sup>て</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。と<sup>あり</sup>。

ありたり ちとぐりくそくそくへんふとく其草を漢籍に所  
 謂鬱菴草のしりちうぐり毛詩江漢云釐爾圭瓚秬鬯  
 一白告于文人錫山土田于周受命自召祖命虎拜稽首天  
 子萬年鄭玄箋一秬鬯黑黍酒也謂之鬯者芬香條鬯  
 也といひ論語に禘自既灌而往者吾不欲觀之趙  
 伯循注云禘王者大祭也朱喜註云灌者方祭之始用  
 鬱鬯之酒灌地以降神云云又率川社祭一飾酒  
 罇と云ふとその心は全ら同くはるるもきくもはるる又  
 治部式に福草瑞草也朱草別名也生宗廟中とあるべ

るにそのやうにふんふんをたぐ今如此るに其由縁の  
 作し事 又和名抄に葛字と當て枝と相値  
 葉と相當也とあるをたぐ葛字に註して福草とあり  
 一しりちをけりし説文に草枝之相値葉と相當以艸易聲也  
 とあるこれ葛の草枝の云云とあるとある字こそ草  
 名にけりし中 著明ししとあるとある誰れこれと和名抄に  
 何れとある彼姓氏録の三莖字とある三又の枝は三とあり  
 かつまはしとある此草のしりちとあるとあるとあるとある  
 故今此姓氏録と右に神祇令と令を考へるとまはし佐伎

久佐了名義ハ飾酒樽と以て員とて酒草の

三枝と書を三笠と用ひたる例は因て義訓を

みやゆいん花印の中とつばけ三ツとちいぐるをハ何

らハ一きヤ是にても因りたるをうら一還りしゆつ

よまらるやルサバ三草多サキクアラハ 春ハ凡て花の開時あれハ

其文字と三枝とを書キ又

曾丹集省冠歌よ

三枝もゆえやしやぞまされハわれつぐよふらふ

ハ福草ハちるま草花と名くると

宇川社条ハ四月を忌と古ハ春山の茂ハ春草の

剪しをよみて秋ハ四月比とも専ら春とつれ

ちるへて又宮内所永範の秋ハあるア野れ小萩が

花の色をへしてすよりがはるは下るゆきまると云も

秋をれば信々とし神祇令ともよく適ハ又周禮ハ

春官鬱人和鬱色とちるれ連ハハ鬱草

かうぶきう此草の予儒家の記もあ見とありて事長

もセバ打は草のすと此ハ省きつ此考是當り

衆説とちり免はるる此ハ考へらるる

なすれ神祇令ハ飾酒樽祭故曰三枝とちる故字のれ

三草之草と書名

即て酒草と云々。姓氏録に三莖之草と書名

一合せて三枝字に三本のことを云ふ。然るに終りきり

古事記麩粟宮段に市邊王の御骨の事と云ふ。短上

御齒者如三枝押齒坐也と云ふ。此、比喻を以て一本の末に三本の

枝分して三草と云ふ。此、かきつばたの事と云ふ。此、かきつばた

の事と云ふ。答ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

樽を古くは酒と注ぐ器と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

種類も多し。又、野山に生じ、ちりちり草と云ふ。然る

に、三本の枝れ、形もくちくちく、生るるも、ちりちり

と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。此、此の事と云ふ。

用ハ萬葉ノ山之端ト山之末ト云々如ク是ノ間  
 ともほそふそ戸障子ちと以て隔つて段々專ら柱と  
 柱とハ中間ト云々上代の家造りも此ノ隔と云々ハ  
 是ハ棟柱と云々一間と云々其家ハ築きゆきまじく隔り  
 送りし屋と送りつりて幾間と云々建継つて云々それ  
 棟敷の送りゆくと富榮ゆきまじり云々送りし屋と  
 ハ棟造と云々送りつりて其形と云々送りし屋と云々  
 上代ノ建継て送りし屋と云々送りし屋と云々送りし屋と云々  
 送りし屋と云々古事記黄泉國段々喚々八田間大室而

ヤシノタテナリハ  
 形ハ

ともハ田間ハ弥咫間の義も云々  
 土室ノおれ常  
 の屋に對へて送り添  
 間との多く廣き送りし屋と云々送りし屋と云々送りし屋と云々  
 古言ち云々是ノて慥と云々打表之のハ雲立神祇乃  
 條ノ合せたり云々送りし屋と云々送りし屋と云々送りし屋と云々

- ちりつたりの木
- 招禱鏡
- 招餅
- 鏡業
- 玉弗
- 竹玉

古今集物名も云々送りし屋と云々送りし屋と云々送りし屋と云々  
 打聴ノ椽ノ其子玉れ如く云々岡玉木と云々送りし屋と云々  
 託之云々和訓栞云古今傳變ノ御賀玉木也

ソレト。假字ト云ク。賢木ト云ク。招魂ヲキマテの象トシ也。  
今も伊勢神宮の祓宜れ宝物ト云ク。伊弉諾ト云ク。此、  
此、説クし據あり。此、次し。今補ふ。此、  
了のく。古事記上巻。天香山之五百津真賢木  
矣。根許士爾許士而於上枝取著八尺勾瓊之五百津  
之御須麻流之玉於中枝取繫八尺鏡於下枝取垂白  
丹寸手青丹寸手。中畧。於是副賜其遠岐斯八尺勾瓊  
鏡。去七神而云。書紀。宜圖造彼神之象而奉招轉  
也。とある。此、皆岩屋戸に隱坐し大御神と奉招ヲキマテ也。

す。其鏡と招鏡ヲキマテと。これハ勾瓊コウジュウと招玉ヲキマテと。也。  
其、遠岐斯ハ。これハ賢木ハ。其招玉と著る木キ也。  
招玉木の義ヲキマテ也。音と持して。此、此、玉也。  
日本紀竟喜歌。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。  
神のむらさき。此、此、玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。  
即ちと著る賢木と云く。此、此、玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。  
鏡ヲキマテと云く。此、此、玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。  
招ヲキマテと云く。此、此、玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。玉也。  
十七放逸。哥。呼。久餘思乃曾許尔奈家礼波。卷十  
二十六





用ひくひくし准くくちん

○賢木葉の書

智人曰く神楽譜よ。○おつちまあれちとづりしとられば  
ふんんがまゝのりけ。言ふ今集。書かしの歌。  
○ふくしとまも也。ふくわつちまのちとふのちと  
あはれ  
源氏神楽上。○ふくちがあはれと  
りら。賢木葉のまゝのりしとらくしとらぬか。  
う。賢木と書しとらしと。ちへの賢木と書みと用ひ  
し。答云。昔あ白成。極る葉上。聖しとれと賢木と

まれちりまねし。支専の神と事。うりひ  
權ちりしと佛ちりしと。佛しとらぬ人けが。う  
佛ちりしとちりしと。神と又他と事  
ちりしと。萬葉卷十一。おくれ志伎美が花れ  
とらしと。うらまはらば。上同集。うらまの賢木  
うらま。うらまのりけ。右のうらま。今  
伊勢の神。言ふと。花賢木と。權と用ひしと。  
此方。ちりしとらしと。ちりしとらしと。ちりしとらしと。  
萬葉そめのち書しと。權と賢木と。うらま。うらま

わびわび... 摺... 万葉一... 一首也

凡て... 新撰字

鏡... 杜... 毛利... 又佐加木... 龍眼... 佐加木... 榭柁... 鏡

二字... 佐加木... 和名抄... 漢語抄... 龍眼木... 佐加木

今按... 龍眼者... 其子名也... 撮を別... 出...

此... 杜... 龍眼... 詳... 異...

本... 伊智佐介... 彼... 延...

於... 鷄... 白... 鳩... 同抄... 拾... 和名... 佐加伎... 名也...

今... 世... 畏者... 加伎... 本... 此... 本... 代... 專... 賢... 本... 潤

り... 名... 負... 右... 大御歌... 因... 名義也

最... 榮... 木... の... 香... 木... 此... 木... 香... 木... 上... 件

の... 歌... 香... 木... 其... 木... 此... 香... 木...

香... 細... 君... 卷... 十九... 香... 具

波... 志... 伎... 親... 之... 御... 言... 卷... 廿... 可... 具... 波... 志... 伎... 都... 久... 波... 能... 夜... 麻

賢... 木... と... 羨... 賞... 了... 玄... 詞... 了... 了

古... 哥... の... 詞... 了... 了... 了... 了... 了

適... 了... 了... 了... 了... 了

了... 了... 了... 了... 了... 了





市... 此古言と云ふ... 常...  
 其義の...  
 二ツの思ふ... 其一ツを...  
 神輿と挽出奉る...  
 天皇の御合神宮... 御所...  
 神輿... 右の貫之順...  
 歌も共... 鈴も注連...  
 今一ツの考へハ山城風土記云賀茂建角身命娶丹波國  
 神野神伊可古後日女生子名玉依日子次田玉依日

賣玉依日賣於石川瀬見小川遊為時丹塗矢自川上  
 流下乃取掛置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建  
 角身命造八尋屋堅八戸扉釀八腹酒而神集々而七  
 日七夜樂遊然與子語言汝父將思人令飲此酒即舉  
 酒坏向天為祭分穿屋慶而升於天乃因外祖父之名  
 号可茂別雷命所謂丹塗矢者乙訓郡社坐火雷命在  
 此故事因て此生坐了御子神と...  
 傳... 即此御祖神ハ下鴨神社御  
 子神ハ上鴨神社... 神名帳に賀茂別雷神社  
 亦若雷名

神大月次 相嘗新嘗 賀茂御祖神社二座。並名神大月次相嘗新嘗  
 此二座ハ彼丹塗矢靈と玉依日賣命と二座也  
 或書みれつり。至く。最初生坐了時の御  
 齋と長き代すぐ。祭る由も。常例としく  
 引たり。今世の言も血統としく恨としく  
 風雅集神祇賀茂遠久朝臣。○あさくみあ  
 野千五百番歌合  
 頭昭法橋。○たれこれのこかくみあれ山神のくま  
 此等てくま。くま野。くま山を

右の御舎のくまも御生のまき共事な  
 明衣のくまも通く。件式阿  
 禮料五色帛とくま物。くま神輿と飾奉る料  
 の帛。後のくま御生祭に用く料の帛とくま  
 明衣の料とくま。帛の敷五色とくま。物づくま  
 其帛と阿礼と云し。盛阿礼と云す。今世  
 の言。神佛に備て奉る物と御備と云う如  
 此類古言も。又午未申の三日の内。何日何  
 一祭。とくま。物。くま。神輿  
 と引奉る。初一日。又。彼御生祭







こゝろをきくは右の家集の詞どりなり明なり  
○水うま

又曰。於ほく水うまやと云ふ。別もあらず。吾も。漢  
國より山驛と對し。水邊の驛とくも此同くも  
を。世よりちやあけの宿のりや。又曰。光明寺  
入道君の踏歌のあれと云ふ

此は古くは水驛と云ふ。又曰。光明寺  
入道君の踏歌のあれと云ふ

又曰。古きなり云水驛と云。男踏歌と云。此は  
也。踏歌のくと。饗應と云。源は。湯邊と云。用  
ると。水驛と云。尚。義なり。又。飯驛と云。菟驛  
と云。此は。饗應と云。義也。此。踏歌のり所と  
云。諸國に驛路と云。其ハ驛と云。馬と云。水驛  
と云。人飯と食し。馬と云。飯驛菟驛  
と云。酒者なりと云。水驛と云。饗應と云  
と。此驛と云。此は。水驛と云。此は。水驛と云。



異名... ころりて

ころりて... ころりて

これに... 知々... 下の...

又知久呂... 知々... 下の...

鳴聲... 出... あり...

○ や... け...

開宿殿人... 木村... 從主... 云... 新撰... 帖卷三... 光俊朝臣

歌... あり... け...

の... あり... け...

... あり... け...

... あり... け...

... あり... け...

... あり... け...

... あり... け...

集... 應和... 尚詩... 頭戴... 青苔... 吐... 鳴... 千山... 雲... 海... 月初... 明

一... 機... 頭... 戴... 空... 諸... 有... 大雅... 松... 風... 無... 以... 聲... あり... 月... 林... 觀... 禪... 師

見... 蛙... 頭... 戴... 青... 苔... 跳... 起... 而... 鳴... 悟... 道... 古... 德... 云... 若... 徒... 文... 珠... 門... 入

者... 牆... 壁... 瓦... 礫... 為... 汝... 鼓... 機... 善... 從... 觀... 音... 門... 入... 者... 蝦... 蟻... 並... 列... 為

汝... 鼓... 機... あり... け...

定... あり... け...

可<sup>メ</sup>カシメ<sup>メ</sup>心<sup>メ</sup>を<sup>メ</sup>し<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>蛙<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>雜<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>鳴<sup>メ</sup>ね<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>。此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>と  
 受<sup>メ</sup>け<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>を<sup>メ</sup>漸<sup>メ</sup>く<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。人<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>か<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>雜<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>。  
 疎<sup>メ</sup>く<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>。此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>を<sup>メ</sup>漸<sup>メ</sup>く<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。人<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>か<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>雜<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>。  
 考<sup>メ</sup>へ<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>。此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>を<sup>メ</sup>漸<sup>メ</sup>く<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。○<sup>メ</sup>。人<sup>メ</sup>目<sup>メ</sup>か<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>雜<sup>メ</sup>る<sup>メ</sup>。

○大<sup>オホクチノ</sup>口<sup>ニガミノ</sup>乃<sup>ハラ</sup>真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>原<sup>ハラ</sup>

吉<sup>オホクチノ</sup>田<sup>ヲ</sup>秋<sup>ハタス</sup>主<sup>ス</sup>

零<sup>オホクチノ</sup>雪<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>之<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>。卷<sup>ハ</sup>十<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>。大<sup>オホクチノ</sup>口<sup>ニガミノ</sup>乃<sup>ハラ</sup>真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>原<sup>ハラ</sup>從<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>。冠<sup>ハ</sup>辞<sup>ニ</sup>

考<sup>メ</sup>ふ<sup>メ</sup>。此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>狼<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>。世<sup>メ</sup>に<sup>メ</sup>猛<sup>メ</sup>き<sup>メ</sup>獸<sup>メ</sup>を<sup>メ</sup>れ<sup>メ</sup>ば<sup>メ</sup>畏<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>ず<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>真<sup>メ</sup>神<sup>メ</sup>と<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>し<sup>メ</sup>も<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>。且<sup>メ</sup>彼<sup>メ</sup>が<sup>メ</sup>口<sup>メ</sup>ハ<sup>メ</sup>殊<sup>メ</sup>に<sup>メ</sup>大<sup>メ</sup>く<sup>メ</sup>あ<sup>メ</sup>れ<sup>メ</sup>ば<sup>メ</sup>。此<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>狼<sup>メ</sup>の<sup>メ</sup>つ<sup>メ</sup>ら<sup>メ</sup>り<sup>メ</sup>て<sup>メ</sup>。

の真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>の原<sup>ハラ</sup>と云<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>此<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>。

崇<sup>ホトケ</sup>峻<sup>タカ</sup>紀<sup>キ</sup>。始<sup>ハ</sup>依<sup>リ</sup>法<sup>ハ</sup>真<sup>マコト</sup>寺<sup>ノ</sup>。此<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>名<sup>ハ</sup>飛<sup>トビ</sup>鳥<sup>ノ</sup>。真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>。名<sup>ハ</sup>飛<sup>トビ</sup>鳥<sup>ノ</sup>。

皆<sup>トモトモ</sup>田<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>。又<sup>ハ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>卷<sup>マキ</sup>二<sup>ニ</sup>

之<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>柿<sup>カキ</sup>本<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>麻<sup>アサ</sup>呂<sup>ノ</sup>作<sup>シ</sup>歌<sup>ハ</sup>。明<sup>アス</sup>日<sup>カ</sup>香<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>原<sup>ハラ</sup>。尔<sup>ハ</sup>久<sup>ク</sup>堅<sup>ク</sup>

能<sup>ノ</sup>天<sup>アメ</sup>津<sup>ツ</sup>御<sup>ミ</sup>門<sup>カド</sup>乎<sup>ヲ</sup>懼<sup>カシ</sup>母<sup>ハ</sup>定<sup>サダメ</sup>賜<sup>メ</sup>而<sup>シテ</sup>神<sup>カミ</sup>佐<sup>サ</sup>扶<sup>サ</sup>。此<sup>ノ</sup>磐<sup>イハ</sup>隱<sup>カクレ</sup>座<sup>マス</sup>。云<sup>フ</sup>之<sup>ノ</sup>と

あり<sup>と</sup>。天<sup>アメ</sup>武<sup>ム</sup>天<sup>アメ</sup>皇<sup>ノ</sup>此<sup>レ</sup>御<sup>ミ</sup>陵<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>。書<sup>キ</sup>紀<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>

陵<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>葬<sup>ス</sup>于<sup>テ</sup>大<sup>オホ</sup>内<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>記<sup>ス</sup>。此<sup>ノ</sup>諸<sup>シロ</sup>陵<sup>ノ</sup>式<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>。檜<sup>ヒノキ</sup>隈<sup>ノ</sup>大<sup>オホ</sup>内<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>

あり<sup>と</sup>。按<sup>シ</sup>。右<sup>ミダリ</sup>の<sup>ノ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>れ<sup>ハ</sup>大<sup>オホ</sup>口<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>大<sup>オホ</sup>内<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>寫<sup>シ</sup>誤<sup>ト</sup>

あり<sup>と</sup>。大<sup>オホ</sup>内<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>真<sup>マコト</sup>神<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>侍<sup>ラ</sup>ら<sup>ズ</sup>。此<sup>ノ</sup>狼<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>

トヲキフカミ  
虎云神の類<sup>トヲキフカミ</sup>と云はれど。大口の<sup>オホウチ</sup>と云はれり。其の<sup>カミ</sup>を  
常<sup>ト</sup>に彼ら名と廣く云神しと云ひし<sup>カミ</sup>と云はれり。如何<sup>カミ</sup>云云。其の  
一處<sup>カミ</sup>を考<sup>カミ</sup>たり。今是と雖も<sup>カミ</sup>。萬葉集中<sup>カミ</sup>  
と。一處<sup>カミ</sup>を考<sup>カミ</sup>たり。今是と雖も<sup>カミ</sup>。萬葉集中<sup>カミ</sup>  
又狼と云ひし<sup>カミ</sup>を呼<sup>カミ</sup>びし。大神の<sup>カミ</sup>象<sup>カミ</sup>と云はれり。虎と神と  
古<sup>カミ</sup>の<sup>カミ</sup>を<sup>カミ</sup>て<sup>カミ</sup>。有<sup>カミ</sup>べ<sup>カミ</sup>り<sup>カミ</sup>ら<sup>カミ</sup>じ<sup>カミ</sup>。今<sup>カミ</sup>云<sup>カミ</sup>は<sup>カミ</sup>。真<sup>カミ</sup>神<sup>カミ</sup>と云  
は<sup>カミ</sup>。其<sup>カミ</sup>大神<sup>カミ</sup>と五七句<sup>カミ</sup>云<sup>カミ</sup>は<sup>カミ</sup>。既<sup>カミ</sup>に古事記<sup>カミ</sup>に  
大口乃真神<sup>カミ</sup>と云はれり。其の<sup>カミ</sup>を考<sup>カミ</sup>たり。既<sup>カミ</sup>に古事記<sup>カミ</sup>に

大口之尾翼鱸<sup>オホウチノオノハタス</sup>と云はれり。又此考と助<sup>カミ</sup>け  
る<sup>カミ</sup>。天武紀諸陵式<sup>カミ</sup>に大内と云はれり。信<sup>カミ</sup>に  
彼地<sup>カミ</sup>ハ大内之真神原<sup>カミ</sup>と云はれり。其大内<sup>カミ</sup>と云  
言<sup>カミ</sup>と除<sup>カミ</sup>て。其詞<sup>カミ</sup>を置<sup>カミ</sup>ま<sup>カミ</sup>し<sup>カミ</sup>。上<sup>カミ</sup>の柿本朝臣の教<sup>カミ</sup>  
原<sup>カミ</sup>と云はれり。又内と口と云はれり。文字の形<sup>カミ</sup>と云はれり。大  
内と大口と云はれり。誤<sup>カミ</sup>りし<sup>カミ</sup>。二處<sup>カミ</sup>を考<sup>カミ</sup>たり。其の<sup>カミ</sup>を  
考<sup>カミ</sup>たり。例<sup>カミ</sup>も多<sup>カミ</sup>く。又一處<sup>カミ</sup>大口と誤<sup>カミ</sup>れり。後人今  
一<sup>カミ</sup>起<sup>カミ</sup>し<sup>カミ</sup>。其の<sup>カミ</sup>を考<sup>カミ</sup>たり。又彼古事

記一、オホクキノ口大之尾翼鱧ヨハクスキとありて本居翁の傳にありと

と訓せしむる萬葉の大口一因ヨハクスキとありてこれに

とありて信タとありて今此を考へて大文字を

木の誤りありてクキブノ口太之尾翼鱧ヨハクスキとありてこれに

とありてこれとありて大口之とありて書づれば口大と

とありてこれの訓とありてこれにオホクキノ大口乃真神原

とありて大内乃此誤とありてこれにオホクキノ大内乃此誤とありて

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

○オホクキノ口大之尾翼鱧

上野國相生郷長書上膳智湖氷と云題あり

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

とありてこれとありてこれに

彼國多嶋の東方とありてこれに

ふらふらと 妻とて ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

此のあやかしき 徳々 其のほろろ 万葉卷七 二十

小 狭夜深而夜中乃方爾鬱之 苦呼之舟人泊兼鴨此

夜中を考註 冬夜半 白りく と言ふ也 といふれ

畧解 宣長 去夜ハ 度の誤り 明中也 なく 註し 此

と 分り 近江の地名 卷九 十一 客在者三

更刺而照 月高嶋山 隱惜毛と あり 明ら けり

略解 深夜の 万葉問答と 書し 本居翁 紀

國の地名 歎と 答へ けり 其端

書し 高島作歌二首とありて 高嶋之阿度河波者驪

鞆と云 歌れ次 出し 近江なる 決し

そへて古 考ハ かの せら けり 昔 古き 一の  
み ちり こと けり けり けり けり けり けり けり けり  
す 見て 思ひ あり あり あり あり あり あり あり あり  
よ あり けり けり けり けり けり けり けり けり

○ あくくく

伊勢物語 女 ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか



けしと。まるとある。此、あつた川と舊説了津國也とのつれど  
 次文。はせりと堀河のむす。中畧。うらふきあうむす。み  
 ーとあくくれあうと。つて。どくくさう。う。けりて  
 ぐ。ら。ら。う。叶。い。此、龍の左注の詞と。近來の注さく  
 とい。ほ人比。ちやむなりとて。割  
 子辨。う。ま。の。こ。し。き。和。事。なり。皆記老の筆なる事。  
 かの。ま。が。伊勢物。後。美。の。委。く。評。ひ。は。ぶ。り。お。な。り。  
 又或を桂川也とつれ。或ハ御溝水の末流なること  
 つけれど。こに河の名と。こ。め。り。る。程。う。て。世。の。致。り  
 う。ら。ら。ら。け。す。い。京。ま。う。う。ね。起。の。こ。も。あ。ま。い。その川のあま  
 なる。あ。ま。い。し。し。い。つ。あ。う。く。ひ。り。さ。な。う。う。つ。ま。い。守。部。が。既。く

居住し下総國葛飾郡幸手サツテ今ハ武蔵國に属り國の北栗橋と云  
 驛の西に嶋住シマヅとあり。十三村一嶋の郷あり。これ  
 郷より今世に用水明水アキと云。あくくさうおれと。阿  
 久登と丸阿久登河と云。其河のほりの田地ケトコロ  
 と。あくとつらと。此、かよと。今耕地と心得。こ  
 なる。此に因。彼、あくくさうの。あくと。と。あくと。  
 田に水れ用なきと紀放落丁川の名。名義ハ明  
 落川のうらまを。おほゆる。あけちとのけ。おま  
 して。おと者。次文。あがく。倉のあつたふ。女とほ  
 き。と。る。り。次文。あがく。倉のあつたふ。女とほ





右の組留クモテは、橋をたおすべし。又今俗に、藁ワラを、  
 平ヒラに組クひて、久傳クハうたふ。本  
 右の組留クモテの組クひて、出デす。右  
 来より註釋、山川の急流は、橋をたおす難き。石  
 籠とよばる。置て、そのを、橋を、ハッ濟ハッす。右  
 其圖より、と出され。彼、三河の八橋、た地、は、  
 爰の、とよめ、を、た。又、然う、も、石河、を、  
 燕カキツバタ子花の、多く、生、出、す。彼、釋、ハ、協、ム

跡一、夫木集卷廿一、意尊法師

三河、形、は、な、り、な、り、な、り、な、り、な、り、な、り、  
 ち、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 み、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 ち、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 ち、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

○丁、隅田河、れ、る、ま、り

武藏、國、粕壁、郷、長、關根、持平、問、云、萬葉卷三、二丁、  
 亦、打山、暮、越、行、而、廬、前、乃、角、太、河、原、尔、獨、可、毛、將、宿、と  
 あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

ひろく、其<sup>ル</sup>處の川也と、既<sup>ハ</sup>く是<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>氏もつら、若<sup>シ</sup>ては  
 駿河國よりありとつら、右の角<sup>ツ</sup>太<sup>ガ</sup>河と、あ<sup>リ</sup>ては川と  
 讀<sup>ミ</sup>誤<sup>リ</sup>て、廬<sup>イホ</sup>前<sup>サキ</sup>と廬<sup>イホ</sup>原<sup>ハラ</sup>と、名<sup>ヲ</sup>れ<sup>テ</sup>近<sup>シ</sup>くあり、次<sup>ニ</sup>並<sup>ビ</sup>び  
 了<sup>ル</sup>、田<sup>ノ</sup>口、益<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>、至<sup>テ</sup>駿河、淨見<sup>ニ</sup>、埼<sup>ニ</sup>作<sup>ル</sup>とあり、歌<sup>ノ</sup>工<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>好<sup>テ</sup>て、  
 浪<sup>ハ</sup>ひ<sup>て</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>れ</sup>あ<sup>ら</sup>う、又古今集、伊勢物語、更級日記  
 ち<sup>と</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>、む<sup>と</sup>の<sup>つ</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>つ</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>つ</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>の<sup>つ</sup>つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>  
 ひ<sup>ろ</sup>く、陽<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、吾<sup>ガ</sup>粕<sup>ノ</sup>壁<sup>ノ</sup>里<sup>ニ</sup>ち<sup>と</sup>る、陽<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>  
 白<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>、本<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>驛<sup>ノ</sup>路<sup>ノ</sup>の西<sup>ニ</sup>ち<sup>と</sup>る、今<sup>ハ</sup>小<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、  
 とい、往昔<sup>ハ</sup>、刀<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、れ<sup>ハ</sup>ち<sup>と</sup>る、つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>、つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>、つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>、つ<sup>ら</sup>み<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>

つらみあらう、即<sup>チ</sup>武<sup>ノ</sup>藏<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>埴<sup>ノ</sup>玉<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>と、下<sup>ニ</sup>総<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>葛<sup>ノ</sup>飾<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>と  
 の<sup>ち</sup>と<sup>ら</sup>る、れ<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>里<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>隅<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、公<sup>ノ</sup>に  
 水<sup>ノ</sup>櫃<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、久<sup>シ</sup>き<sup>ニ</sup>時<sup>ノ</sup>より、陽<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、  
 傳<sup>ヘ</sup>り、俗<sup>ニ</sup>所謂<sup>シ</sup>梅<sup>ノ</sup>若<sup>ノ</sup>丸<sup>ノ</sup>の塚<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、や<sup>ハ</sup>舊<sup>ノ</sup>く<sup>ニ</sup>も  
 とい、又<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>は、陸<sup>ノ</sup>奥<sup>ノ</sup>へ往<sup>ル</sup>來<sup>ス</sup>、通<sup>ル</sup>る、古<sup>ノ</sup>き  
 事<sup>ノ</sup>跡<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、遺<sup>ノ</sup>り、下<sup>ニ</sup>谷<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、  
 とい、東南<sup>ノ</sup>ハ、上<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>の入<sup>ル</sup>海<sup>ノ</sup>の<sup>ち</sup>と<sup>ら</sup>る、地<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、  
 小<sup>ノ</sup>牡<sup>ノ</sup>蠣<sup>ノ</sup>殻<sup>ノ</sup>蛤<sup>ノ</sup>貝<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>出<sup>ル</sup>、岸<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、地<sup>ノ</sup>と<sup>ら</sup>る、  
 古<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>れ<sup>ハ</sup>、出<sup>ル</sup>、當<sup>ノ</sup>昔<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>江<sup>ノ</sup>戸<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>

今も河のあそびにむねおぼえむそのすしりしを  
 つらばりしりつらそりしとあそびに答ふ萬葉卷十四  
 小佐吉多萬能津尔乎流布祿乃サキタマノツニナルフネノ  
 ちく馬つとんぐん 中古に隅田川より其地より  
 ありきし。今の大江戸は東より西の比よりつら  
 けり。詳サカカちしむ。つらそりしとあそびに答ふ  
 ちく高倉天皇の御代に頃ありしりそりしむら  
 鎌倉に將軍のまゝに居りしりすしとありし  
 あり。夫木集卷廿一四十五ノ名所歌。光俊朝臣

ありしりしりし。ハキタムとそりしむら  
 ありしりしりし。左註云此歌ハ康元元年鹿島社に  
 詣りしりし。すしりしりしとそりしむ。彼わたり。今りしりし  
 ちくちくちくちくちくちくちく。既し今の大江戸に隅田川  
 のすしりしりし。源平盛衰記治承四年云云。石濱と申  
 す所ハ江戸太郎が知行所也。折節西國船の著しり  
 と。數千艘あり。三日の甲に浮橋とす。江戸太郎  
 小合力下りそりし。此治承四年より。右に康元元年  
 ちくちく。七十七年より。按し今の大江戸の隅田川

の西岸に橋場と云地れありそ彼浮橋と爲り  
跡を尋ねしこれ始り此江戸太郎の知行下と  
信じて相替り河のほと此起り轉せり

○ 尾の川

嶋田福雄 房川御 問云夫木集卷三十三

みまの川と云り此川は里人を此川と云  
わつと云ふ此川は川にカ根川といふ  
又別と云ふ川は此川と云ふ和名抄の上

野國群馬郡馬 尾 ありて二三句ハ歸來  
つと群馬里と兼つと云ふ川は四句も人と病と  
カ根川に兼つと云ふ川と云ふ川を云ふ  
或人群馬郡と勢田郡と云ふ川は關根村と云ふ  
ありて其知らる川根川の流是れと云ふ川は  
川と云ふ川は此川と云ふ川は此川と云ふ川  
まよひてなりて其川今五人ハ廣瀬川と云ふ  
群馬郡の東北にありて京へ往来する川  
をこれに云ふ川は此川と云ふ川は此川と云ふ

しつとて... 纒う... 彼歌の外... 是れ  
も... 別... あり... あり  
あり... あり

○あつらひ... のりぎり

○浪屋れ浦... のりぎり

○浪屋れ... のりぎり

青木恭順 幸寺 郎長 問云新勅撰集雜一

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり  
人... 浪屋れ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり  
あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり  
のりぎり... のりぎり... のりぎり

つら... のりぎり... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり

あつらひ... のりぎり... 浪屋れ... のりぎり



つゞの。續後紀卷十五。承和十二年八月乙亥朔辛巳。淡路國石屋濱與播磨國本文此七明石濱始置船并渡子以備往還云云とある。此時よりさざりし

○鶴岡の柳原

或人曰る。平泰時の柙の歌

や〜〜。詠めさるれ柙のまゝれちと〜〜。答云。ち〜〜。柙めると〜〜。答云。二句。柳原と〜〜。鎌倉志。柳

原ハ八幡宮舞殿の邊より東。薬師堂の前ありと

つゆ昔柳ま〜〜。枯株今猶存やう

と名ゆ。右の歌の柳原と。歌枕名寄

柙のまゝれ〜〜。あやう〜〜

○〜〜橋

あ〜。同云。夫木集卷廿一。家長卿

日〜。此、占回橋の事。或抄。神社考と引。つ〜。説ハ〜。起ある〜。答云。源平

盛衰記卷十一 一條堀川の戻橋より橋より東へ  
 小車と立ち上りて橋より戻りし。中畧 一條戻  
 橋より多きを昔安部晴明の天文能淵源と稱す。十二神  
 將と侍ひりて其妻職神の貌に畏れれば彼十二神  
 と橋の下に呪し置て用事の時に召使ひりて是  
 より吉凶の橋を身回す。必ず職神人の口に移り  
 善惡を示すと申す云々。これハ既くありてなり。  
 くらり

○内阿曾 ウチノアソ 内宿禰 ノスクネ 内臣 ノオミ 内兵 ノツバタ 内物部 ノモノヅメ

内阿曾内宿禰ハ一稱子就て昔より云々の説  
 あれは云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
 云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
 内阿曾 ウチノアソ 内宿禰 ノスクネ 内臣 ノオミ 内兵 ノツバタ 内物部 ノモノヅメ  
 公卿等 ミヤノキミトナリ 御慮 ミコトケ 天皇 ミカド 吾御族 ミカドノミヤコ  
 朝暮 アサヨ 馴 ナ 内某 ウチノナニカ 呼 ヨ 坐 カ  
 御詞 ミコトコト 稱 コトナ 今世 イマヨ 言 コト 自己 オノミ  
 内の首長 ウチノウヂナリ 自己 オノミ 内 ウチ 若黨 ニガト 云 コト 内 ウチ 親 ミヤコ 云 コト

を、常々内ノの共ニと、ことわりでしありぬ。同ノ心ヲなすれ、  
心ヲき時ニを任シつけて、心ヲへる事ヲ多クらう。同ノ心ヲなすれ、  
御親ノ言ハとて、すゑとて、其ノ書ヲ紀ス仁德天皇大御  
歌ニ。武内宿祢と指シて、多ク奉テ破ル屢ニ宇知能阿曾破ハ萬  
葉卷一ニ。近江大津宮御宇天皇代、天皇詔内大臣藤  
原朝臣ニ。此ハ項末内外の位ニあり、大錦冠ヲて、續紀  
養老五年藤原房前公と内臣と詔ス。又寶龜九年魚  
名公と為内臣とて、又同紀宣命一家持郷の  
事ヲと、今朕御世尔當互母内兵止念召互ト云々ト大  
伴佐伯宿祢波自兼天皇御世内乃兵止為而仕奉兼ト

云々ト内物部ノ事ヲ。あはれと云々ト。知能阿曾ノ畿内  
と内闕宮城と内裏ノ家ト吾内トつり。と云々ト同意  
なり。然レ古事記ニ右の仁德天皇建内宿祢と指  
し。宇知能阿曾と詔ス。処ノ傳ニ註ス云内ハ大和國宇  
智郡ニ。此ハ人兄弟共ニ。其処ニ居住ス故ニ。兄と味  
師内宿祢ト此人と建内宿祢ト云々ト。これと云々ト。  
此ハ宿祢等ノ宇智郡ニ居住スと云々ト。その事ヲ。その事ヲ。  
兄弟共ニ。内宿祢と稱ス。純ク。わい  
ちと云々ト。彼ハ兄弟ト甘美ト。弟ト

武<sup>タケ</sup>の<sup>カ</sup>り<sup>シ</sup>く<sup>ハ</sup>、美<sup>ミ</sup>稱<sup>セイ</sup>の<sup>カ</sup>り<sup>シ</sup>く<sup>ハ</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、武<sup>タケ</sup>内<sup>ウチ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と。

若<sup>ニ</sup>ら<sup>ハ</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>内<sup>ウチ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>親<sup>コト</sup>し<sup>テ</sup>、<sup>ハ</sup>

此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>應<sup>オウ</sup>神<sup>シン</sup>紀<sup>キ</sup>九<sup>ク</sup>年<sup>ネン</sup>の<sup>ハ</sup>條<sup>ジョウ</sup>と、<sup>ハ</sup>此<sup>コト</sup>、

兄<sup>イニ</sup>弟<sup>テイ</sup>、<sup>ハ</sup>盟<sup>メイ</sup>神<sup>シン</sup>探<sup>タン</sup>湯<sup>トウ</sup>と成<sup>ナリ</sup>り、<sup>ハ</sup>賜<sup>ミタマヒ</sup>りし<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>武<sup>タケ</sup>内<sup>ウチ</sup>命<sup>ノミ</sup>、

此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>御<sup>ミコ</sup>世<sup>ヨ</sup>と、<sup>ハ</sup>五<sup>イ</sup>代<sup>ダイ</sup>の<sup>ハ</sup>朝<sup>アサ</sup>と、<sup>ハ</sup>奉<sup>ホウ</sup>仕<sup>セ</sup>り、<sup>ハ</sup>世<sup>ヨ</sup>と、<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup>し<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>忠<sup>チュウ</sup>誠<sup>テイ</sup>、

人<sup>ヒト</sup>と、<sup>ハ</sup>若<sup>ニ</sup>兄<sup>イニ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>人<sup>ヒト</sup>と、<sup>ハ</sup>假<sup>カ</sup>令<sup>レイ</sup>其<sup>ソノ</sup>時<sup>トキ</sup>、

物<sup>モノ</sup>諍<sup>シヤウ</sup>の<sup>ハ</sup>是<sup>ココロ</sup>非<sup>ヒ</sup>ハ、<sup>ハ</sup>決<sup>ケツ</sup>め<sup>ル</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>罪<sup>ツイ</sup>を<sup>ハ</sup>以<sup>モ</sup>り、

了<sup>シ</sup>、<sup>ハ</sup>此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>是<sup>ココロ</sup>行<sup>ユク</sup>事<sup>ジ</sup>ハ、<sup>ハ</sup>為<sup>ナ</sup>り、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>の

甘<sup>カン</sup>美<sup>メイ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>又<sup>マタ</sup>、<sup>ハ</sup>五<sup>イ</sup>代<sup>ダイ</sup>の<sup>ハ</sup>朝<sup>アサ</sup>と、<sup>ハ</sup>奉<sup>ホウ</sup>仕<sup>セ</sup>り、<sup>ハ</sup>弟<sup>テイ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>見<sup>ミ</sup>換<sup>カ</sup>へ、

少<sup>シ</sup>き<sup>カ</sup>忠<sup>チュウ</sup>臣<sup>シン</sup>と、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>と、<sup>ハ</sup>弟<sup>テイ</sup>と、<sup>ハ</sup>内<sup>ウチ</sup>

の<sup>ハ</sup>間<sup>マ</sup>に、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>と、<sup>ハ</sup>弟<sup>テイ</sup>と、<sup>ハ</sup>内<sup>ウチ</sup>の

宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>美<sup>メイ</sup>稱<sup>セイ</sup>坐<sup>ゼ</sup>つ、<sup>ハ</sup>所以<sup>ソノ</sup>と、<sup>ハ</sup>知<sup>チ</sup>る、<sup>ハ</sup>此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>弟<sup>テイ</sup>と、<sup>ハ</sup>内<sup>ウチ</sup>

弟<sup>テイ</sup>命<sup>メイ</sup>功<sup>コウ</sup>績<sup>ゼキ</sup>と、<sup>ハ</sup>年<sup>ネン</sup>齡<sup>レイ</sup>と、<sup>ハ</sup>相<sup>サイ</sup>共<sup>コウ</sup>と、<sup>ハ</sup>若<sup>ニ</sup>ら、<sup>ハ</sup>人<sup>ヒト</sup>等<sup>トウ</sup>と、<sup>ハ</sup>後<sup>ゴ</sup>世<sup>セ</sup>

に、<sup>ハ</sup>武<sup>タケ</sup>内<sup>ウチ</sup>命<sup>ノミ</sup>の<sup>ハ</sup>一<sup>ヒト</sup>人<sup>ヒト</sup>、<sup>ハ</sup>其<sup>ソノ</sup>名<sup>ナ</sup>の<sup>ハ</sup>高<sup>タカ</sup>い、<sup>ハ</sup>弟<sup>テイ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>讒<sup>セン</sup>と、<sup>ハ</sup>此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>

甘<sup>カン</sup>美<sup>メイ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>、<sup>ハ</sup>彼<sup>カノ</sup>探<sup>タン</sup>湯<sup>トウ</sup>、<sup>ハ</sup>負<sup>オシ</sup>れ、<sup>ハ</sup>弟<sup>テイ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>讒<sup>セン</sup>と、<sup>ハ</sup>此<sup>コト</sup>、<sup>ハ</sup>兄<sup>イニ</sup>

一<sup>ヒト</sup>つ、<sup>ハ</sup>故<sup>コト</sup>と、<sup>ハ</sup>若<sup>ニ</sup>、<sup>ハ</sup>武<sup>タケ</sup>内<sup>ウチ</sup>宿<sup>シュク</sup>稱<sup>セイ</sup>と、<sup>ハ</sup>強<sup>コウ</sup>て、

地名<sup>チゴ</sup>と、<sup>ハ</sup>出<sup>デ</sup>り、<sup>ハ</sup>稱<sup>テイ</sup>と、<sup>ハ</sup>右<sup>ミダ</sup>に、<sup>ハ</sup>續<sup>コツ</sup>紀<sup>キ</sup>の<sup>ハ</sup>内<sup>ウチ</sup>、<sup>ハ</sup>臣<sup>シン</sup>内<sup>ウチ</sup>、<sup>ハ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>内<sup>ウチ</sup>、

物<sup>モノ</sup>部<sup>ブ</sup>と、<sup>ハ</sup>又<sup>マタ</sup>、<sup>ハ</sup>何<sup>ナニ</sup>と、<sup>ハ</sup>又<sup>マタ</sup>、<sup>ハ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>考<sup>コウ</sup>と、<sup>ハ</sup>彼<sup>カノ</sup>内<sup>ウチ</sup>、<sup>ハ</sup>大<sup>ダイ</sup>臣<sup>シン</sup>の<sup>ハ</sup>

と此公と内臣とつれハ内つ宮の事と事々知るハ  
と云ふれ日本紀歌解云々云々云々云々云々  
此内外と計會し行て因る内臣と申しと云ふ武内  
言補と云ふ内河曾と云ふり云々云々云々云々  
連ふり説ぐれり凡そ棟梁れ臣人御世との  
あり誰云れり内外と計會し行てある彼養老  
五年十一月此詔凡家<sup>有</sup>沈痼大小不安卒廢事故  
汝卿房前當作内臣計會内外准勅施行輔翼帝業永  
寧國家と記されハ既前御世と云ふは

ありと執其々事如く云々云々云々詔  
云々云々云々内宿祿兄弟鎌足公云々云々  
及云々事云々云々云々云々内外  
計會し行て執云々云々外宿祿外臣と云々云々  
云々云々云々梅云々云々又武官の大伴佐伯  
二氏物部云々云々外と衛防<sup>モリ</sup>職云々云々  
云々内兵内物部と詔云々云々云々  
云々御親云々云々出云々云々稱云々云々と云ふし  
○云々云々云々 ○云々云々云々 ○云々云々云々





小當とあり。又土佐日記に「かゝる事なれば、下の  
 小口とくくすれ。今世に幼子なれば、その流ととひり  
 初ら流に於て、初會ありとて、あはて流とて、下り  
 流とあり。即ち、下りたるなり。此類の文選に、坐字と  
 訓に、書紀に、漫字と訓とあり。又伊勢物語  
 に、その流とて、下りたるなり。とあり。宇都保  
 物語に、その流とて、下りたるなり。常とあり。下  
 あり。下りたるなり。下りたるなり。に、即ち、下り  
 あり。下りたるなり。下りたるなり。下りたるなり。

小當あり。ちこれ詞に、かゝる事なれば、下の  
 小口とくくすれ。今世に幼子なれば、その流ととひり  
 初ら流に於て、初會ありとて、あはて流とて、下り  
 流とあり。即ち、下りたるなり。此類の文選に、坐字と  
 訓に、書紀に、漫字と訓とあり。又伊勢物語  
 に、その流とて、下りたるなり。とあり。宇都保  
 物語に、その流とて、下りたるなり。常とあり。下  
 あり。下りたるなり。下りたるなり。下りたるなり。

○下りたるなり。○下りたるなり。○下りたるなり。  
 又問、これれ、ちこれ、周朝に、かゝる事なれば、下の  
 小口とくくすれ。今世に幼子なれば、その流ととひり  
 初ら流に於て、初會ありとて、あはて流とて、下り  
 流とあり。即ち、下りたるなり。此類の文選に、坐字と  
 訓に、書紀に、漫字と訓とあり。又伊勢物語  
 に、その流とて、下りたるなり。とあり。宇都保  
 物語に、その流とて、下りたるなり。常とあり。下  
 あり。下りたるなり。下りたるなり。下りたるなり。





丁... 考... 神代紀... 始起... 烟末生出之兒... 火闌降命...  
... 火々出見尊... 亦號火折尊... 古事記... 火速理  
命... 天津日高日子穗々手見命... 火闌降... 降  
... 既... 燃... 炎... 火闌降... 熾居

の... 著明... 古事記... 撰者の文字  
... 皇祖の尊号... 漫り... 文字と... 出...  
... 彼... 亦... 御名... 入...  
... 若... 尊號... 文字... 説...  
... 又外... 燃...  
... 彼... 須佐之男命... 須勢理...  
... 我勝云而於...  
... 勝... 進... 又萬葉卷一

神長柄神佐備世須登之云卷二上守真人佐備而云

卷四上大船乎榜乃進尔云云類を文字に進

と書くこと進むるを云ふは其の進むるを云ふ

比喩の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

のゆゑ問の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

猶も類ひ多し中一巻十一朝露尔咲酔左乾垂鴨

頭草之云云と云ふは此の全る同例の如き事なり

云々の色紫して云々霞潤と云々咲進むる事なり

云々此の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

古哥之彼凡て云々

云々云々云々

云々云々の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

物と云々云々

活轉と同例の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

云々云々の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

云々云々の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

云々云々の如く進むるを云ふは其の進むるを云ふ

又後云々云々

か  
く  
て  
と  
し  
ふ  
ろ  
更  
し  
は  
語  
の  
意  
を  
考  
へ  
や  
り  
て  
ほ  
ひ  
お  
り  
み  
得  
し  
こ  
と  
あ  
り  
共  
下  
つ  
巻  
の  
中  
て  
こ  
と  
れ  
つ  
ひ  
下  
し  
こ  
と  
わ  
り  
お  
け  
り  
此  
と  
又  
全  
て  
を  
り  
て  
上  
何  
れ  
も  
こ  
と  
わ  
り  
て  
も  
彼  
歌  
辞  
要  
解  
頭  
書  
の  
説  
ひ  
み  
が  
り  
き

*Faint handwritten text, possibly bleed-through or a second column of text.*

